読売歌壇

小池　光　選

十九年はたらきて尽きし冷蔵庫の電源コードの汚れをぬぐふ　長野市　原田　浩生

【評】十九年、家族の団欒を見てきた冷蔵庫がついに寿命となった。廃棄処分にするそれを、感謝の気持ちをこめてきれいにする。コードの汚れまで丹念に拭く。ありがとう。

嫁に行く一人娘の寂しさを村に残して白鳥が去る　山形市　柏屋　敏秋

【評】あたたかくなって、村の水辺に冬をすごした白鳥たちがいっせいに北へ去った。あたかも一人娘が嫁にゆくような空虚感。ユニークな発想に実感が籠もる。

天井の木目を見つつさまざまの思いは古りぬ家もわが身も　竹原市　岡元　稔元

【評】天井板の模様は、下に暮らす人にいろいろな連想を与えてくれる。幾十年も見てきたそれ。実にさまざまなことがあった。

気をもみし娘が無事に初出勤なにはともあれ四月朔日　神戸市　大浜　義弘

日本語で語りかけくる青年は我に故郷の母を見てをり　野洲市　宮川　秀穂

投げ銭の路上ライブのその場所に白い病衣の人いた昭和　横浜市　桃井　恒和

古木にも春は今年の花が咲く太き腕の黒光りして　町田市　小堀　正伸

子の嫁が来れば明るくなる我が家山小屋の灯のランプの如し　守谷市　久保田洋二

鉄道の車掌をすると便りありよき女子校に我は勤めき　東京都　山川　信一

「孫にするように私にギュッとして」言えば素直に夫はギュッとす　和歌山県　助野貴美子

栗木　京子　選

江ノ電はけふもふくらみ花の寺、大仏へ海へロマンを運ぶ　逗子市　鈴木喜久代

【評】国内外の観光客で鎌倉はいつも賑わっている。伝統文化の厚みがあり、海の開放感もたっぷり。江ノ電の「ふくらみ」は走行時のカーブでもあり、混雑ぶりでもあろう。

社会的距離も今では死語となり人群れ集う夢洲の地に　東京都　佐藤　一郎

【評】コロナ禍の日々によく耳にした「社会的距離」だが今は気にしなくなった。四月に開幕した大阪・関西万博には多くの人が集っている。世の中の推移を端的に描いた歌。

旅行とは非日常だと思いきやフェリーに揺られ編み物する友　八尾市　水野　道

【評】フェリーでは海を眺めたくなりそうだが、編み物をする友。旅の楽しみ方は人それぞれ。船と編み物の取り合わせが新鮮だ。

途切れなく車窓をよぎる桜ばな九州横断傘寿の旅に　長崎市　平川ミツ子

「其処此処に罠があります」立て札の墨新しき春の竹林　宇都宮市　武藤さちこ

五十年苦しむ人を数多診て亀のそばでは黙して過ごす　箕面市　手島　愛雄

人生に山やら谷があるけれど「波ばかりだ」と妻は言い切る　姶良市　井之川健児

ゆれ動く相互関税にただ祈るわが生活の壊れぬことを　白井市　野老　功

孫たちはのこらず成年、職に就く土産はいらぬぞ元気にすごせ　深谷市　村田　利雄

玄関に和菓子のやうなベビー靴よちよち歩きの一歩始まる　伊勢崎市　川野　忠夫

俵　万智　選

面接のついでに会えば面接がついでになってゆく日曜日　大和郡山市　大津　穂波

【評】そもそもは面接日に合わせての約束だったのが、いつしか会うことが主で面接のほうが従になっていた。「面接」と「ついで」をリフレインしながら、端的に簡潔にリズミカルに表現したところが、みごと。

サッカーの試合をテレビに観てをれば芝生に鳥の過りゆく影　市原市　井原　茂明

【評】スポーツとは、まったく別次元で生きている鳥の影。二つの世界が交差して、一瞬、熱狂から覚めるような感覚が面白い。

穴あきの靴下をまだ履いている夫婦になったってことかもしれぬ　川崎市　浅野　愛佳

【評】たまたまその日にあいた穴ではないことを、知っているのは自分だけだ。ささいな日常の共有に、戸惑いと嬉しさがにじむ。

履歴書を間違えぬよう書いている間違いだらけの人生なのに　熊本市　夏風かをる

万国旗広げるようにシャツを干す曇天の日も喧嘩の朝も　八王子市　吉村のぞみ

「でもこれはナイショだから」と吾子の言う小学生の目の色をして　東村山市　すだちひな

一字ずつ空いた花瓶に丁寧に生けるみたいなきみのおはよう　越谷市　あきやま

淋し気にぽつんと立っているけれどカラーコーンは明るい名前　守口市　小杉なんぎん

菜の花の黄色緑色空の青たまごサンドを食べたい朝だ　愛知県　はぎはらともこ

介護用スプンの窪み小さかり更に小さく白粥掬ふ　千葉市　千秋庵

黒瀬　珂瀾　選

逆光の桜あなたの欠点をついぞ知らないまま年を取る　本巣市　板垣　志歩

【評】それほどに理想的な「あなた」と過ごせているのか、それとも、欠点に気付けない程度にしか「あなた」に近づけないのか、どちらでしょうね。そのどちらでも、桜と逆光の奥で影となる「あなた」は魅力的です。

さきやかな草に頬寄せおさな子が「オランダミミナグサさんおはよう」　熊本市　森山　昭子

【評】大人は雑草として見過ごす草も、おさなごにとっては、立派な名前のある一つの命。新鮮な目で世界を見つめる子どもの世界。

死ぬ前にマンモス見たし触りたし科学倫理の是非はともかく　調布市　菊川　直樹

【評】絶滅種のクローン培養には倫理的な疑問が提示される。が、科学のロマンに躍る心を抑えられないのも、人間の真実ですね。

万博の中だけに有る人類の平和と知恵と夢が少々　柏市　藤嶋　務

トランプさん何処にでもゐて吾が町の小さき病院の小さき王様　佐賀市　花野　一直

途方もない豪雨の夜に黙々といちご一族煮詰めておりぬ　千葉市　芍　薬

れんげ田に寝ころびて聞くミツバチの羽音しづけし平和の余韻　宮崎市　木許　裕夫

春風に乗りて駈け来る君を待つ君の生家の跡地に立ちて　神戸市　新美ゆかり

をさな児が大き歯見せて笑まふときふとおもかげに顕ちくる亡兄は　宇都宮市　阿久津登美江

カーテンからそっと覗けば愛犬の欠伸している春のうららか　岐阜市　阿部　ナミ

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇次回は19日（月）に掲載　右の影絵はさつき